

博士論文

多元文化の時代における「エスニックな美学」
——〈日本美学〉の構築に向けての〈幽玄〉の研究——

(要約)

平成 31 年 3 月

広島大学大学院総合科学研究科

総合科学専攻

鄭子路

目次

凡例	1
序章 多元文化の時代における〈日本美学〉の構築へ向けて	
一、〈日本美学〉という概念.....	2
二、西欧中心主義的な美学の終焉.....	7
三、方法としての〈幽玄〉または〈幽玄〉の方法.....	11
第一章 「和魂漢才」から「和魂洋才」へ——近代日本における「美学」の成立——	
はじめに	16
一、日本における「近代化」の開幕.....	22
(一) 「近代」および「近代化」の定義.....	22
(二) 「和魂漢才」としての佐久間象山.....	23
二、「美学」の訳名.....	25
(一) 東アジアにおける「美学」の伝来.....	25
(二) 啓蒙思想家の模索——西周を中心に——.....	27
(三) 「美学」という訳名の初出——『維氏美学』への再評価——.....	35
三、「美学」の制度化.....	41
(一) 日本講壇美学の濫觴.....	41
(二) フェノロサの業績およびその美学講義.....	44
(三) ケーベルと美学講座の創設.....	51
おわりに	59
第二章 幽玄論史百年——複眼的・総合的研究への道程——	
はじめに	62
一、森鷗外と石橋忍月の「幽玄論争」をめぐって.....	64
(一) 幽玄論争の背景.....	64
(二) 幽玄論争の内容.....	67
(三) 幽玄論争の結論.....	69
二、美学と文芸批評の絡み合い.....	74
(一) 鷗外早期の文芸批評活動.....	74
(二) 鷗外の美学三期と標準的美学.....	87
三、近代幽玄論の地平.....	100

(一) 日本人美意識論の展開.....	100
(二) 大西克礼の幽玄論.....	103
(三) 久松潜一の幽玄論.....	107
(四) 岡崎義恵の幽玄論.....	114
おわりに.....	118
第三章 東アジアにおける〈天人合一〉の詩学——〈幽玄〉の解明を中心に——	
はじめに.....	121
一、存在論的概念としての幽玄.....	122
(一) 中国における幽玄という言葉の起源.....	122
(二) 中国における幽玄という言葉の成立.....	125
(三) 中国における幽玄という言葉の世俗化.....	128
二、様式的概念としての幽玄.....	133
(一) 日本における幽玄という言葉の初見.....	133
(二) 日本における〈幽玄体〉の成立.....	137
(三) 幽玄体に関する日本中世諸家の解釈.....	146
三、美的理想としての幽玄.....	151
(一) 日本中世文芸における幽玄美の発達.....	151
(二) 幽玄美の構造.....	157
(三) 幽玄美の特質.....	159
おわりに.....	167
終章 幽玄論の理論的射程と〈日本美学〉の新しい可能性	
一、全文の結び.....	169
二、今後の課題.....	173
あとがき.....	175
参考文献一覧.....	179
参考図版一覧.....	189
附録Ⅰ 日本近代美学史年表（明治・大正期）.....	194
付録Ⅱ 幽玄論一覧表.....	207
附録Ⅲ 歌合における藤原基俊・俊成・定家・為家の幽玄用例.....	214
附録Ⅳ 定家仮託書における幽玄体の記述.....	219
附録Ⅴ 世阿弥能楽論における幽玄の用例.....	222

本論は、2015年の春に提出した「中世歌論における幽玄の研究」（広島大学大学院総合科学研究科修士学位論文）を基石に、四年間の博士課程後期の勉強・研究を蓄えた成果であり、〈幽玄〉や〈日本美学〉をめぐる論者の学術的思索の総括でもある。ここでは、筆者が終章の「全文の結び」を簡潔にまとめた「要旨」のほかに、この課題に取り組もうと意図した事情および各章の由来について簡単に説明した「あとがき」に基づいて加筆修正し、「要約」に代える。

彫刻家でありながら詩を書く高村光太郎はかつて「自分と詩との関係」において、「私は何を措いても彫刻家である。彫刻は私の血の中にある。私の彫刻がたとひ善くても悪くても、私の宿命的な彫刻家である事には變わりがない。ところでその彫刻家が詩を書く。それにどういふ意味があるか。以前よく、先輩は私に詩を書くのは止せといつた。さういふ餘技にとられる時間と精力とがあるなら、それだけ彫刻にいそしんで、早く彫刻の第一流になれといふ風に忠告してくれた。それにも拘らず、私は詩を書く事を止めずに居る。なぜかといへば、私は自分の彫刻を護るために詩を書いてみるのだからである。自分の彫刻を純粹であらしめるため、彫刻に他の分子の夾雜して來るのを防ぐため、彫刻を文學から獨立せしめるために、詩を書くのである」¹と述べた。

私は高村のような天才で、かつ多能な人間ではない。和歌や能のことをちっともわからない「よそ者」であった。しかし、こういう私はあえて〈幽玄〉を研究テーマとして定め、広大な美学史を取り扱いはじめた。これはより本質的な「日本的なるもの」を勉強したい、より幅広い知識を身につけたいという、文化の「他者」としての心性に由来するのかもしれない。あるいは、150年前オランダへ出航した西周や120年前中国からやってきた魯迅と同じく、後発国からの「生徒」としての志向を持つからかもしれない。これは牛と同じような、まずいっぱい食べて、また後日胃の腑から吐き出して、もう一度ゆっくりと咀嚼するという消化法である。

今年（執筆時点：2018年）は明治維新の150周年にあたる。日本文化への関心は世界各地から寄せられている。特に中国では、清末以来の第二次日本留学ブームを迎えているといえよう。筆者はその大波の中にある一人である。私見によれば、世界的に「近代化」が批判されて再検討されてきたが、中国にはそれが十分に遂げられていないし、当然真の多元文化の現代社会にもなっていないと思われる。「真理」というものは本当にあるのだろうか。「真理なるがゆえに役立つのではなく、役立つがゆえに真理である」ということがただ「啓蒙時代の通性たる实用主義」²にすぎないと吉田精一が指摘したように、ちょうど40周年を迎えた中国の改革開放はまさに「真理」の標準に関する大討論から始まったのである。近代や真理への再検討は日中両国の共通な時代的话题であり、私の個人的な関心でもある。

「序章」はこのような「私」が代表として発足し、同じく日本の近代文芸や近代化へ関心を持つ留学生を中心に集めた平成30年度広島大学学生独自プロジェクトという共同研究の申請書に基づいて大幅に加筆・修正したものである。第一章もこのプロジェクトの経費支援

によって調査範囲を広げたり、日本美学会全国大会若手フォーラムで発表したりすることができた。第一章の「はじめに」に挙げたように、＜日本美学＞の中には日本近代美学史の分野において研究の積み重ねが多くあり、山本正男、金田民夫、神林恒道などの先生方はすでに日本近代美学史の枠組みを築き上げたといえる。彼らの示した方向へ進むわれわれにできるのは、ただこの枠組みにほんの少しことを付け加えるだけである。第二章は＜幽玄＞について明治時代に森鷗外と石橋忍月との間に論争があった、と偶然知ったところから着手し、森鷗外の博学や鋭敏さに魅力されて手を離すことができなくなり、彼に関する研究を続けたことが由来となっている。鷗外研究において、小堀桂一郎先生の存在は大きく、特に時間順に整理した『森鷗外——文業解題』は鷗外研究の必読書といってもよいだろう。本論もこの本を参照しながら、自分なりの問題意識を持って、鷗外の文芸批評などを改めて読んで彼の美学の道を整理した。第三章は修士論文の進化である。修士論文に比べ、本論で特に注力したのは、＜幽玄＞の思想的背景の解明や詩学による解釈である。特にこの章の第一節における、＜幽玄＞に含まれる中国人の山岳信仰は、荒見泰史教授のゼミナールを受けた際、白須浄眞・荒見泰史両先生から教示を頂いたり、ゼミの皆さんと切磋琢磨したりすることを通じて意識したことである。第二節における詩学的な分析方法は、主にリップス流の心理学的美学から摂取したものであり、尼ヶ崎彬先生の『歌の道の詩学』、佐藤透先生の『美と実在——日本の美意識の解明に向けて』および朱光潜先生の『文芸心理学』より多くの示唆を受けた。第三節における「崇高」との比較は、桑島秀樹教授の「崇高研究」から影響を受けて始めたものである。「仁者乐山、智者樂水」と桑島先生が『崇高の美学』で引いたように、「崇高」の美的範疇化の歴史における西洋人の山岳体験を重視した点は、桑島先生の「崇高研究」の創見であり、＜幽玄＞と「崇高」を比較しようとする私に多くのヒントを与えた。そしていうまでもなく、全般において、本論は指導教官である青木孝夫教授から指導を頂き、＜日本美学＞の構築に関する先生の思想や方法論を受け継いだ。

各章節の初出に関して、より詳細な情報は以下のとおりである。

序章【研究計画書】「多元文化の時代における「エスニック」な美学—日本近代美学史の構築に向けての総合的探求—」広島大学学生独自プロジェクト、書面提出、2018年6月15日於広島大学大学院総合科学科第2会議室口頭発表、採用期間2018/8-2019/3、メンバー：鄭子路（総合科学研究科）・劉敏（総合科学研究科）・付宇倩（教育学研究科）・孫于恵（文学研究科）・片山俊宏（総合科学研究科）、サポート教員：青木孝夫（総合科学研究科）・佐藤利行（文学研究科）³。

第一章

第一節【論文】「和魂漢才到和魂洋才——近代日本美学的導入」（中国語）（日本語訳：「和魂漢才から和魂洋才へ——近代日本美学の導入」）『中国美学』（首都師範大学中国美学研究センター・鄒華主編）第2号、社会科学文献出版社、2016年、第103-113頁⁴。

第二節【口頭発表】「もう一つの「美学」事始—近代日本における「美学」という訳名の変遷およびその学問の制度化—」美学会第69回全国大会若手フォーラム（『発表要旨集』第62頁）、2018年10月8日於関西大学、投稿予定⁵。

第三節【口頭発表】「日本学院派美学淵流考——兼談大西克礼的“幽玄論”」（中国語）（日本語訳：「日本講壇派美学の淵流に関する一考察」）,The 8th International Conference of Eastern Aesthetics, Shanxi University, Taiyuan Shi, Shanxi Sheng, China, 2016.10.29.

【学会報告書】The Birth and Dissemination of “Aesthetics” in Recent East Asia: Based on China and Japan, *Culture and Art & Philosophy in the Age of Digital Transformation*, SungKyunKwan University, 2017, PP.52-66.

【論文】「日本学院派美学源流考」投稿予定。

第二章

第一節【論文】「幽玄論史百年（一）—森鷗外と石橋忍月の「幽玄論争」をめぐって—」『人間文化研究』（人間文化研究会編）第9号、2017年、第53-70頁。

第二節（一）【論文】「森鷗外文芸美学思想初探——以其早期的文芸批評為中心」（中国語）（日本語訳：「森鷗外文芸美学思想の解明——早期の文芸批評を中心に」）『中国美学』第3号、2017年、第52-65頁⁶。

第二節（二）【論文】「森鷗外文芸美学思想再探——鷗外的美学三期与標準美学的嘗試」投稿予定。

第三節【論文】「幽玄論史百年（二）—複眼的・総合的研究への道程—」『人間文化研究』第11号、2019年、印刷中。

第三章

第一節【論文】「「幽玄」はどこからきたのか—中国古典資料における「幽玄」の解明—」『藝術研究』（広島芸術学会編）第29号、2016年、第45-58頁⁷。

第二節【論文】「「幽玄」への招待—その意味と研究の展望—」『人間文化研究』第10号、2018年、第45-62頁。

第三節【論文】「「幽玄」の詩学—日本古典資料における「幽玄」の解明—」投稿予定。

終章 書き下ろし

また、中国首都師範大学文學院の鄒華教授の厚意に甘えて、筆者は『中国美学』第2号から毎号日本人美学者の論文を訳出し続けている。本論に関連するもの（サブタイトル略）は以下である。

青木孝夫「芸道的中心概念：審美習慣」『中国美学』第2号、2016年、第103-113頁。

「關於近代日本“教養主義”的成立」『中国美学』第3号、2017年、第26-38頁。

「花与状況的美学」『中国美学』第5号、2018年、第109-128頁。

桑島秀樹「何謂崇高」『中国美学』第2号、2016年、第65-86頁。

「崇高美学的体系化」『中国美学』第3号、2016年、第65-86頁。

神林恒道「東西方之間的書法美学」『中国美学』第3号、2017年、第3-13頁。

萱のり子「和歌編織的書法」『中国美学』第3号、2017年、第14-25頁。

濱下昌宏「志賀重昂『日本風景論』与日本式崇高」『中国美学』第4号、2018年、第99-119頁。

大石昌史「人格主義与移情美学」『中国美学』第6号、2019年、印刷中⁸。

最後に、簡単ながら、在学中にお世話になった先生方、同窓諸君、東広島21ロータリー

クラブの方々（カウンセラー：土肥慎二郎先生）および長い間に支えてくれた家族に感謝の気持ちを伝えておきたい。そして、広島県東広島市という都市・町の土地にも感謝したい。平成 29 年度ロータリー米山奨学生として東広島 21 ロータリークラブ（「一人の留学生の眼——私の日本像」東広島 21 ロータリークラブ 10 月第 3 例会、2017 年 10 月 23 日於グランラッセ東広島）や東広島ロータリークラブ（「中国、そして日本——私の「故里」」東広島ロータリークラブ 11 月第 3 例会、2017 年 11 月 21 日於グランラッセ東広島）に招かれて卓話した際に述べたように、広島県東広島市はいままで私が出身地（中国江西省徳興市）を除きにもっとも長く住んだ土地である。私はここで妻と出会って結婚し、元気で可愛い娘を迎えることができた。ここはまさに私の第二の「故里」となっている。この土地と縁がなければ、こんなに素晴らしい方々に出会うことはできず、この論文もないはずである。皆様に心より感謝し、この論文を指輪も買えなかったままに私と結婚してくれた妻に捧げたいと思う。

¹高村光太郎「自分と詩との関係」『昭和文学全集 22』角川書店、1952 年、第 178 頁。

²吉田精一『近代文芸評論史 明治篇』至文堂、1975 年、第 25 頁。

³関連情報 URL：https://www.hiroshima-u.ac.jp/rm/dokuji/dokuji_30（最後閲覧日 2019 年 2 月 18 日、下同）

⁴関連情報 URL：<https://www.jikan.com.cn/article/873423.html>

⁵関連情報 URL：<http://www2.kansai-u.ac.jp/taikai69/pdf/60.pdf>

⁶関連情報 URL：<http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/ja/00046420>

⁷関連情報 URL：<http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/ja/00042776>

⁸関連情報 URL：https://www.jikan.com.cn/collectedPapers_631.html